

天台山の詩歌（其六）

盛唐（中の上）

薄井俊二 埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

はじめに

本稿は、天台山に関わる詩歌について検討を加えることを通して、当時の人々の天台山に対するイメージとその変遷を考察しようとするものである。今回は、盛唐期の詩として李白の作品十二点（天台山に関わらない詩二点を含む）を取り上げる。^{1）}

凡例

・李白の詩は内容から、A「李白自身が天台山を訪れたことを契機とするもの」、B「李白以外の人間が天台山を訪れることに関わるもの」、C「神山としての天台山を詠うもの」、D「山岳を描く絵画に関わるもの」に分ける。本稿では、紙幅の関係から、A全部、BとCの一部を取り上げる。

・凡例は、以下以外はこれまでと同じ。
・韻は、平水韻で示す。

七 天台山の詩（其六） 盛唐（中の上）

A 李白自身が天台山を訪れたことを契機とするもの

【35】 同友人舟行遊台越作

友人とともに舟行して台越に遊ぶの作

李白

天台前集（以下「前集」）巻上

全唐詩卷一七九、古今圖書集成（以下「古今」）卷二二五、宋本卷一八、

王注本卷二一

本文と訓訳

楚臣傷江楓

楚臣江楓に傷いたみ

謝客拾海月

謝客海月を拾ふ

懷沙去瀟湘

沙を懷かかにして瀟湘を去り

挂席泛溟渤

席を挂かかげて溟渤うっかに泛ぶ

蹇予訪前跡

蹇あゝ予われ前跡おとなを訪ひ

獨往造窮髮

獨り往いき窮髮いたに造らんとす

古人不可攀

古人攀つかべからず

去若浮雲沒

去ること浮雲の没するがごとし

願言弄倒景

願こころはくは言ことに倒景を弄し

從此鍊眞骨

此より眞骨を鍊たくらんことを

華頂窺絶溟

華頂に絶溟を窺のぞひ

蓬壺望超忽

蓬壺に超忽わたを望まん

不知青春度

知らず青春わたの度わたるを

但怪緑芳歇

但ただ怪あやしむ緑芳やの歇やむを

空持釣鼈心

空しく釣鼈つづの心こころを持ち

從此謝魏闕

此より魏闕つづに謝あやせん

文字の異同と校勘

題を、王注本は「同友人舟行」とする。

語注

友人…不詳。 台越…今の浙江省あたり。 楚臣傷江楓…「楚辞」招魂

に「湛湛江水兮上有楓、目極千里兮傷春心」とある。 謝客拾海月…謝靈

運「遊赤石進帆海」（「文選」卷二一、拙稿「其二」）に「揚帆采石華、

「挂席拾海月」とある。 溟渤：暗い海。「莊子」逍遙遊に「窮髮之北有冥海者、天池也」とある冥海に同じ。 窮髮：前注。世界の果て。 倒景：孫綽「遊天台山賦」に「天台山……或倒景於重溟」とある。 緑芳：不詳。諸注に見えず。 大野は黒髪。若さや生命力を表すか。 釣鼈：「列子」湯問に、大海の中の神山を支える大鼈がいたが、ある大人がそれを一度に六匹釣り上げてしまったため、神山が漂流してしまったという話がある。 李白「贈薛校書」(宋本卷八)に「未誇觀瀟作、空鬱釣鼈心」、「登高丘而望遠海」(宋本卷四)に「六鼈骨已霜、三山流安在」とある。 魏闕：王の宮殿。「莊子」讓王に「中山公子牟謂瞻子曰、身在江海之上、心居乎魏闕之下、如何」とある。

口語訳

楚の臣下であった屈原は、江のほとりの楓を見て心を傷ませ
謝霊運は海月を拾いに行こうとした
その後、屈原は砂礫を懐に入れて瀟湘へ入水し
謝霊運は蓆を帆としてかかけ、大海に浮かんだ
ああ、私は前人の足跡をたどり
船でひとり行き、世界の果てまで行こうとしている
しかし、古人の跡はたどることができず
浮雲が消えてしまったように、遠く去ってしまった
願うことは、船を浮かべて、水に逆さまに写っている天台山の姿
を弄び
真の骨相を鍛錬することだ
華頂峯から遠い海原を眺め
蓬萊山から遙か彼方を遠望しよう

青春の日々がいつまで続くかは分からないし
緑芳が尽きてしまいかと怪むしかないのだ
おおげさにも、大海の中で神山を支えている鼈を釣り上げような
どといった志を抱き
君王には別れの挨拶をして、江海に浮かぼう

解説

韻字は「月・渤・髮・没・骨・忽・歇・闕」で、入声六月の韻。 五言古詩。

大野・安注とも天宝六年(七四七)の作とする。

題名及び本文に華頂峯の語が見えることから、天台山を訪れたことを契機とする作だと見てよく、彼がここに至ったことを示す証左の一つであろう。

世俗を離れて天台山を含む台州へ向かおうとしている。それは屈原や謝霊運をなぞる旅だが、「願言弄倒景、從此鍊眞骨。華頂窺絶溟、蓬壺望超忽」の句が注目される。「倒景」は注に見えるが天台山を指し、華頂峯から深い海を窺うという。これらの語は、彼がこれから向かうのが確かに天台山であることを示している。さらに「鍊眞骨」とは、彼の地で道士としての修養に励むことが訪問の目標であることを表し、最後に蓬萊山に至っていることは、訪問の成果として仙境に登ることがあることを示している。天台山を訪ねる旅は、名山遊行を目的としたが、更に仙道修行がその先に見据えられているのである。

【36】天台曉望(題桐柏觀) 天台曉望(桐柏觀に題す)

前集卷上、天台勝蹟録（以下「勝蹟録」）卷三、周本、許本卷四

天台山方外志（以下「方外志」）卷二八、全唐詩卷一八、

古今卷一二五、馬大品等撰『中国仏道詩歌総彙』（以下「仏道詩歌」）、

宋本卷一九、王注本卷二一

本文と訓詁

天台隣四明 天台 四明に隣し
 華頂高百越 華頂 百越に高し
 門標赤城霞 門は標す 赤城の霞
 樓榭滄島月 樓は榭す 滄島の月

憑高遠登覽 高きに憑りて遠く登りて覽れば
 直下見溟渤 直下に溟渤を見る
 雲垂大鵬翻 雲垂れて大鵬 翻り
 波動巨鼉没 波動きて 巨鼉没せん
 風潮爭洶湧 風潮 争ひて洶湧し
 神怪何翕忽 神怪 何ぞ翕忽たる

觀奇跡無倪 奇を觀て 跡 倪無く
 好道心不歇 道を好みて 心歇まず
 攀條摘珠寶 條に攀じて 珠寶を摘み
 服藥鍊金骨 藥を服し 金骨を鍊る
 安得生羽翰 安んぞ得ん 羽翰を生じ
 千春臥蓬闕 千春 蓬闕に臥せんことを

文字の異同と校勘

題を、前集は「題桐柏觀」、勝蹟録・方外志は「桐柏觀」、宋本は「天台曉望（吳中）」、王注本は「天台曉望」とする。「高百越」勝蹟録作不可越。「滄」方外志作蒼。「憑高遠登覽」勝蹟録・方外志作憑危一登覽、古今作憑高一登覽。「波動」勝蹟録作風濤。「鼉」勝蹟録・方外志・全唐詩・古今・王注本作鰲。「風潮」方外志・古今作風濤。「争」勝蹟録・方外志・古今作常。「觀奇跡無倪」勝蹟録・方外志・古今作恰情觀斯境。「珠」宋本・全唐詩・王注本作朱。「翰」宋本・勝蹟録・方外志・全唐詩・古今・王注本作毛。「千春」勝蹟録・方外志・古今作千秋。

語注

題：宋代明代の文献では「桐柏觀にて」、李白の詩文集では「天台での曉の望」と題されてきた。孟浩然に「舟中曉望」と題する詩があり、李白がそれを意識していたのかも知れない。孟にはまた「宿天台桐柏觀」と題する詩もある。四明：四明山は天台山に隣接する名山だが、孫綽「遊天台山賦」に「登陸則有天台四明」とあるように、天台山と併称される。門標赤城霞：孫綽「遊天台山賦」に「赤城霞起而建標」とある。実際に赤城山は、天台県城から天台山に入る入り口にあたり、あたかも門、あるいは標識をなしているかの如くである。樓：もちろん人工建造物を意味するが、天台山には瓊台という自然が造った楼閣とされるところもある。それらを意識したものと解した。滄島：仙境である滄州に同じだろう。孟浩然「宿天台桐柏觀」の詩に「緬尋滄洲趣」の句がある（拙稿「其五」【29】）。見溟渤：天台山の華頂峯は、望海尖とも呼ばれ、そこから海が見渡せたと伝える。雲に覆われがちな華頂峯からは雲海を見下ろすこともあったよ

うで、眼下に広がる雲の海を、実際の海と重ね合わせて捉えられたのであろう。大鵬：「莊子」逍遙遊の大鵬説話を踏まえていよう。巨鼈：「列子」湯問に大海に巨鼈がいるとの説話がある。【35】既出。翕忽：早い様

口語訳

天台山は四明山の隣りにあり
その最高峯の華頂峯は越の国々の中に高く聳えている
赤城山にまとわる霞は天台山の門標のごとく
高殿のごとき聳える峯には、仙境を照らす月が宿っている

高いところに登って遠くを眺めれば

真下に大海原が見渡せる

垂れ込めた雲は大鵬が羽翼を翻しているのであろつし

波の中には巨大なスッポンが潜んでいる

風と潮が争って沸き立ち

摩訶不思議な変化が次々と起こっていく

こうした奇景を見ていては思いは果てなく

道を求める心がやむことはない

仙境の玉樹に手を掛けて登攀し、その珠の実を摘んで食べ

仙薬を服用し、身体を靈的に堅牢にする

どうにかして体に空を自由に飛べる羽翼を生やし

千年もの長い間、仙人の館で眠りたい

韻字は「越・月・渤・没・歇・骨・闕」で、入声六月の韻。五言古詩。青木に訳注あり。

大野は天寶元年（七四二）の作とし、加藤はそれに従う。そうであれば、玄宗に召し出された頃となる。安注は天寶六年（七四七）の作とする。そうであれば、朝廷から放逐され、新たなつてを求めて遍歴していた頃の作となる。

初めの四句は天台山を概説する。門と楼について、本稿では天台山にある自然物の、赤城山と瓊台などの巖と取った。しかし、これらを李白が宿泊している桐柏観という建造物の、門と楼閣と取ることもできよう。中間部分の六句では、天台山からの眺めを述べる。大野は、ここは想像であり、実際の眺めではないとするが、加藤は実体験を踏まえたものと取る。孫綽の賦や、「莊子」「列子」の説話を踏まえた表現を織り込んではいないが、題から見ても李白が実際に天台山を訪れて滞在し、そこでなにがしかの実体験をし、それを踏まえて作られたものと見る方が妥当であろう。そして、天台山を訪れ、華頂峰などの高所から遠くや下界を眺める李白は、眼下にひろがる雲海を見ているうちに、あたかも大空から大海を見下ろす鳳凰になった気持ちになっていく。そしてそのまま神仙世界へと昇っていくことを夢想するのが、最後の六句。

この詩における天台山は、詩人が実際に訪れた場所で、下界を見下ろす高山であり、仙界・天界への入り口である。眼下に広がる雄大な光景を眺めている作者は、やがて自らがそこから神仙世界へ至ることを思う。「攀條」「摘珠寶」「服藥」は天台山における仙道修養を表し、その目的は「鍊金骨」して昇仙することにあるわけである。

【37】早望海霞邊 早つとに海霞の邊を望む

李白

前集卷上

全唐詩卷二八、宋本卷一九、王注本卷二一

本文と訓訳

四明三千里	四明三千里
朔起赤城霞	朔 <small>つと</small> に起つ 赤城の霞
日出紅光散	日出でて 紅光散じ
分輝照雪崖	輝を分かち 雪崖を照らす
一餐嘯瓊液	一餐 瓊液を嘯 <small>の</small> めば
五内發金沙	五内に金沙發す
舉首何所待	首を擧ぐるは 何の待つ所ぞ
青龍白虎車	青龍と 白虎の車

文字の異同と校勘

「朔」宋本・全唐文・王注本作朝。「紅」底本作江。倣全唐文・王注本改紅。
 「嘯」王注本作咽。「首」宋本・全唐詩・王注本作手。「待」底本作得。倣
 全唐詩・王注本改待。

語注

首…諸本では「手を挙げる」ことになる。

口語訳

四明山は三千里にもわたり

朝早々に赤城山から立ち上る霞におおわれる

やがて太陽が昇ると、その光が霞に映えて紅の光が発し

分かれ散つては、雪の積もった崖を照らし出していく

ひとたびでもその輝く霞をくらい、玉の液を飲むならば

五体内部に黄金の砂もできるだろう

頭をあげて待ち望んでいるのは

(それに乗って仙界を自由に飛び回れる) 青龍と白虎の牽く車で

ある

解説

韻字は「霞・沙・車」で、下平六麻の韻と、「崖」で、上平九
 佳の韻。五言古詩。

大野は天宝元年(七四二)の作とし、加藤もそれに同じ。安注
 は天宝六年(七四七)の作とする。いずれにせよ、用語の類似性
 から、【36】と同じ時のものではないかとされる。【36】同様、李
 白が実際に山岳を訪れての体験を踏まえた作品である。

この詩では四明山を歌うが、この山が、赤城山から立ち上る霞
 におおわれた姿が描かれている。早朝に霞む海のあたりを望む、
 という題から、四明山を遠くから眺めた実景として設定されてい
 ると考えられる。

山を蔽うきらきらと輝く霞は、神仙へと昇華する仙薬とされて
 おり、ここでも天台山は、仙界・天界へ至る入り口とされている。
 そしてその「瓊液」を「嘯」むことで、「五内」に「金沙」が生
 じ、昇仙することができるのである。この詩でも天台山は、【35】

【36】同様、仙境へ昇るための仙道修養の場と捉えられているといえよう。

【38】贈王判官時余歸隱居廬山屏風疊

王判官に贈る 時に余 歸隱し、廬山屏風疊に居る

李白

前集等収録せず

全唐詩卷一七、宋本卷九、王注本卷一

本文と訓訳

昔別黃鶴樓

昔別る黃鶴樓

蹉跎淮海秋

蹉跎たり淮海の秋

俱飄零落葉

俱に飄る零落の葉

各散洞庭流

各おの散じて洞庭に流る

中年不相見

中年相ひ見えず

躑躅遊吳越

躑躅として吳越に遊ぶ

何處我思君

何れの處に我君を思ふや

天台綠蘿月

天台 綠蘿の月

會稽風月好

會稽 風月好し

却遶剡溪迴

却つて剡溪を遶りて迴る

雲山海上出

雲山海上より出で

人物鏡中來

人物鏡中より來る

一度浙江北

一たび浙江を度りて北し

十年醉楚臺 十年 楚臺に醉へり

荊門倒屈宋 荊門に 屈宋を倒し

梁苑傾鄒枚 梁苑に 鄒枚を傾く

苦笑我誇誕 苦はなはだ我が誇誕を笑ふ

知音安在哉 知音 安くにか在る

大盜割鴻溝 大盜 鴻溝を割く

如風掃秋葉 風の秋葉を掃ふが如し

吾非濟代人 吾は代を濟ふの人に非らざれば

且隱屏風疊 且しばらく屏風疊に隱れん

中夜天中望 中夜 天中を望み

憶君思見君 君を憶ひ 君に見はんことを思ふ

明朝拂衣去 明朝 衣を拂ひて去り

永與海鷗群 永へに海鷗と群せん

文字の異同と校勘

宋本を底本とする。「中夜」底本作中望。倣全唐詩・王注本改中夜。

語注

王判官…不詳。黃鶴樓…湖北省武昌郊外にある。淮海…今の江蘇省

蘇州一帶。屈宋…屈原と宋玉。梁苑…漢の梁王が造った庭苑で、鄒陽

・枚乗らの文士を集めた。知音…心の通い合った友人。「列子」湯問に載

せる、伯牙の弾く琴の音を聞いただけで、鍾子期が伯牙の気持ちを理解し

た話に基づく。大盜…安祿山を指すというのが諸注の一致した意見。

鴻溝：「史記」によれば、秦を倒した項羽と劉邦は、鴻溝という場所を境に中国を二分して統治したという。拂衣：帰隱すること。謝靈運「述祖德詩」（「文選」卷一九）に「高揖七州外、拂衣五湖裏」とある。海鷗：「列子」黄帝に、無心に海浜でカモメと遊んでいる人がいた。ある時彼の父親に命じられ、カモメを捉えようという意図を以て海浜に来ると、カモメは近寄って来なくなったという話を載せる。

口語訳

昔、黄鶴楼で君と別れ

うだつの上がらぬまま蘇州あたりをさまよった秋の日々
落ち葉とともにひるがえり

川におちては洞庭湖へ流されていった

その後お会いすることもなく

あてもなく呉越をさまよった

そんな中、どこで君のことを思い出していたかといえは
緑の蔦が絡まる天台山の上の月を眺めていたときだった

会稽の地は風月がよいと聞き

再び剡溪を溯ってそちらへ向かった

そこでは雲や山が海から浮かび上がっているようであり
人も物も、映っている鏡の中から出てきたようであった

更にひとたび錢塘江を渡って北に行き

それから十年、楚の地で酔い痴れていた

楚の荊門山あたりでは屈原や宋玉を圧倒する詩を作り

梁苑のあたりでは鄒陽や枚乗を凌ぐほどの才能を示した
しかしそうした私をホラ吹きだと笑うものばかり
私の才能を理解してくれる人はどこに行ってしまったのか

そんな中、大泥棒が国家を二つに引き裂いてしまい

秋風が落ち葉を払うように世界は無秩序に陥ってしまった
しかし私は世の中を救えるような人材ではないので

取りあえず廬山の屏風疊に隠棲しよう

夜半に天の真ん中を望めば

君のことを思い出し、会いたいと思った

しかしそれもかなわぬ。明朝、衣を払ってこの世から立ち去り

未永く海鷗と戯れよう

解説

韻字は「樓・秋・流」で、下平一尤の韻。「越・月」で、入声六月の韻。「廻・來・臺・枚・哉」で、上平一灰の韻。「葉・疊」で、入声一六葉の韻。「君・群」で、上平一二文の韻。五言古詩。算に訳注あり。

大野・安注とも至徳元年（七五六）の作とする。七五五年に勃発した安録山の乱の最中、廬山に隠棲している時の作とされる。

王某に遠くから贈った詩で、世に入れられぬことを知己である彼に寄せて吐露するものとなっている。そして、別離の間に、お互いのよき理解者であると想定されている王某を思い出す所として、天台山が登場している。李白自身がこの山を訪れたことを表すものだが、先の詩に見たような遊仙的な雰囲気はない。ただ、

来し方を振り返り、自らをも振り返る内省をうながす場所として、天台山が選ばれているといえよう。

B 李白以外の人間が天台山を訪れることに関わるもの(一部)

【39】送楊山人歸天台 楊山人の天台に歸るを送る

李白

前集巻上

方外志巻三、全唐詩巻一七五、宋本巻一四、王注本巻一六

本文と訓訳

客有思天台	客に天台を思ふ有り
東行路超忽	東行路超忽たり
濤落浙江秋	濤は落つ 浙江の秋
沙明浦陽月	沙は明らかに 浦陽の月
今遊方厭楚	今遊方に楚を厭ひ
昨夢先歸越	昨夢先づ越に歸る
且盡秉燭歡	且く盡くさん 燭を乗るの歡び
無辭凌晨發	凌晨に發するを辭すること無かれ

我家小阮賢	我が家の小阮の賢なる
剖竹赤城邊	竹を剖く 赤城の邊
詩人多見重	詩人重んぜらるる多きも
官燭未曾然	官燭未だ曾て然やさず
興引登山屐	興は山に登るの屐を引き
情催泛海船	情は海に泛ぶの船を催す

石橋如可度 石橋如し度るべくんば
携手弄雲煙 手を携へて 雲煙を弄べよ

文字の異同と校勘

「歡」方外志作懽。「燭」方外志作燭。

語注

楊山人：後掲の李白の詩「送楊山人歸嵩山」「駕去温泉宮後贈楊山人」の楊山人と同じだろう。楊炎の父の楊播ではないかとされる。楊炎(七二八～七八一)は、小楊山人と号された(これは父親が「楊山人」と称されたのに対する「小楊山人」であろう)。楊播は楊炎の伝記に記録が残る程度だが、それによれば、孝を以て称され、玄宗が諫議大夫に任じたがやがて棄官した。肅宗に至って、即家のままで散騎常侍に任ぜられ、玄靖先生と号された。李白に「駕去温泉宮後贈楊山人」(宋本巻八)と「送楊山人歸嵩山」(同巻一五)がある。他に張九齡に「送楊道士往天台」、高適に「送楊山人歸嵩山」、劉長卿に「夜宴洛陽程九主簿宅、送楊山人往天台、尋智者禪師隱居」がある。浙江：今の錢塘江。大潮の時には波が河を溯ること有名。浦陽：浦陽江。錢清江の異称があり、おだやかな河川なのであろう。秉燭：「古詩十九首」に「晝短苦夜長、何不秉燭遊」とあり、夜の遊びを楽しむこと。李白の「春夜宴桃花園序」にも見える。小阮：阮籍の甥の阮咸が「小阮」と称されたことから、甥の別称。剖竹：郡守(地方官)となること。官燭：官より支給される蠟燭。これを燃やさないとは、官費を浪費しない、清廉な人であること。登山屐：謝靈運は、登山用の専門の靴を造り用いていたという(「南史」「謝靈運伝」)。泛海：謝安は、孫綽らと海に浮かぶ楽しみを尽くしたという(「晋書」「謝安伝」)。

口語訳

天台山に帰りたいたいと思ってる客人がいらつしやる

東へ遠い道のりをたどられる

その途中、秋の銭塘江では、激しく遡行する豪快な大波を眺められるだろうし

浦陽江のほとりでは、月の光が沙を照らす清らかな風景を眺められるだろう

客人はこのたびの楚への遊行に飽きがこられ

昨夜の夢の中で、一度お帰りになられたほどだった

(しかし客人よ)今しばらく燭を採つての夜の楽しみを尽くし

明日早朝の出発とすることをご選択なさいませ

私の甥は阮咸のような賢者で

赤城山のあたりで地方官をしております

詩人として人々に重んぜられ

決して官費を浪費することのない清廉さで知られています
興が起これば登山の靴を履き、謝霊運のように山を散策し

情が至れば船を浮かべ、謝安のように海遊びを楽しんでいます
もしも天台山に戻られて、石橋を渡ることがおできになるなら

彼と手を携えて、雲煙に包まれた仙界にお上りなさい

解説

韻は「忽・月・越・發」で、入声六月の韻。「賢・邊・然・船

・煙」で、下平一先の韻。五言古詩。

大野は天寶二年(七四三)の作とする。後掲の「駕去温泉宮後贈楊山人」が李白の出仕時代のものだとし、それと同じ折のもの判断したのか。また詹注は、「題解」で許嘉甫「李白交友考録三題」を紹介し、詩中の「我家小阮賢」を李嘉祐であるとし、彼が台州刺史であった時期と考え合わせて、上元二年(七六一)の作とする。ただし詹注自身は、備考で「詩之情調又與李白上元時期之心情不類、存疑以俟再考」とその判断を保留する。一方安注は、開元二十七年(七三九)の作とする。それは詩中の「我家小阮賢」を李白の甥の李良であろうとし、彼が浙江刺史だったのは開元年間であつて、李白が楚の地にいたのは、同二十七年だからだとする。

一方、張九齡に「送楊道士往天台」があり⁽²⁾、熊飛は開元二五年(七三五)頃の作だろうとする⁽³⁾。そうであれば、本詩と張九齡の詩の二首は、同じ時に「送別の宴」において作られたものかもしれない。当時まだ官界ではなにもなしていなかった李白にとつて、張九齡と唱和できたとすれば名誉なことであるとし、人脈作りの点でも大きかつたろう。その張九齡がほめる楊山人に対しても、李白はそれなりの敬意を以て詩を作つたはずである。

とはいへ、送別の宴席における作品は、得てして儀礼的な雰囲気
気を帯び、硬直化した表現になりがちである。李白のこの詩も、
謝霊運や謝安を引くという常套的な手法を取っており、親しみや
暖かみに乏しいように感じられる。安注のいう若年の作という説
を取りたい。

詩自体は、楊山人と呼ばれる人物が天台山に帰るのを見送るもので、前半では楊に対する敬意が感じられる。後半では台州にい

る自分の甥を友人として推薦するものとなっている。前半の敬意が真のものならば、甥を売り込もうという「あざとさ」も感じられる⁽⁴⁾。なお、最後の二句、李白自身が一緒に行きたいと述べているという解釈もあるが、詩の流れから見れば無理がある。

この詩では天台山は、楊山人という賢者（隠者）の帰隠先とされている。茫漠とした神山ではなく、詩人の眼前にいる人間が訪ねる実体性を帯びた山岳として捉えられている。しかし、錢塘江や浦陽江といった、帰郷の途中の景勝は美しく描かれても、天台山そのものについては「石橋」の存在を述べるのみで、具体的な描写や豊かなイメージを伴ってはいない。その意味では、六朝以来の、神山としての天台山の姿からそれほど遠いものではない。

*次に、参考として、天台山とは関わらないが、楊山人に関わる李白の詩を二首掲げる。

「参考1」駕去温泉宮後贈楊山人

駕して温泉宮を去るの後、楊山人に贈る

李白

前集等収録せず

全唐詩卷一六八、宋本卷八、王注本卷九

本文と訓訳

少年落托楚漢間 少年落托す楚漢の間
風塵蕭瑟多苦顔 風塵蕭瑟として苦顔多し
自言介蠹竟誰許 自ら言ふ介蠹にして 竟に誰か許さ

んと

長吁莫錯還閉關 長吁し莫錯として還つて關を閉づ

一朝君王垂拂拭 一朝君王拂拭を垂れ

剖心輸丹雪胸臆 心を剖き丹を輸して胸臆を雪ぐ

忽蒙白日回景光 忽ち白日の景光を回らすを蒙り

直上青雲生羽翼 直ちに青雲に上つて羽翼を生ず

幸陪鸞輦出鴻都 幸に鸞輦に陪して鴻都を出で

身騎飛龍天馬駒 身は騎る飛龍天馬の駒

王公大人借顔色 王公大人顔色を借し

金章紫綬來相趨 金章紫綬來りて相ひ趨る

當時結交何紛紛 當時交を結ぶ何ぞ紛紛たる

片言道合惟有君 片言道合するは惟だ君有るのみ

待吾盡節報明主 吾の節を盡して明主に報ずるを待ち

然後相攜臥白雲 然る後に相ひ攜へて白雲に臥せん

文字の異同と校勘

宋本を底本とする。題を、全唐詩は「駕去温泉後贈楊山人」とする。「托」

全唐詩・王注本作魄。「介蠹」底本一・全唐詩作管葛。「章」全唐詩作璋。

語注

蕭瑟…秋風が吹き抜ける様。ものさびしい様。 介蠹…詹注は梗塞と、

青木は狷介な性格と解する。全唐詩のように「管葛」ならば、管仲と諸葛

青木は狷介な性格と解する。全唐詩のように「管葛」ならば、管仲と諸葛

亮のこと。己を彼らに比していることになる。莫錯…素漠に同じ。意氣消沈すること。拂拭…器物の塵芥をぬぐってその真価を見いだすこと。

白雲…一般名詞でも白雲は深山を表す。とりわけ天台山は、司馬承禎が白雲と号していたことからこの語との連想ははたらきやすい。あるいは天台山を指しているか。

口語訳

(私は)少年時代は南方のあたりを落ちぶれて移る世俗の厳しい風に吹かれて苦々しい顔ばかりしていた自ら思っていた、ふさがれた心は誰も認めてくれないと長く嘆息し、しょんぼりと門を閉ざして引きこもっていた

それがある朝、私の真価を見抜いた皇帝の抜擢を受けたため胸を開き赤誠を示して、懐に抱く思いを残さず申し上げたするとたちまち太陽の光の如き恩寵を蒙ることとなり羽翼を生やして蒼天に馳せ登り、朝廷で活躍することとなった

そしてこの度、幸いにも皇帝陛下に従って大都を出て飛龍天馬に乗って行幸に随行することとなった

王公大人たちも顔色を和らげて来るし

高位高官たちも小走りに駆け寄るありさま

今や交わりを結んだ人は数知れず

しかし一片の言葉でも意気投合できるのは、ただ君ひとり

どうか私が忠誠を尽くしてすぐれた君主に恩返しをするのを待つ

ていてくれたまえ

そのあかつきには君と手を携えて、白雲の彼方へ隠棲しよう

解説

韻字は「間・顔・關」で、上平一五刪の韻。「拭・臆・翼」で、入声一三職の韻。「都・駒・趨」で、上平七虞の韻。「紛・君・雲」で上平一二文の韻。七言古詩。青木に訳注あり。

李白の長安出仕は天宝元年(七四二)から同三年(七四四)のわずか三年間であつたとされる。その間に、皇帝の温泉宮への行幸に侍従したことを契機とした作品で、大野は天宝二年(七四三)、安注は同元年の作とする。なお李白には他に「侍從遊宿温泉宮作」(宋本卷一八)・「温泉侍從歸逢故人」(同卷八)がある。

皇帝の温泉宮への行幸に侍従できたことを喜び、多くの貴顕たちとの交わりを誇らしげに歌う。その上で、本当に分かり合える知己として楊播をあげ、功成り名遂げた後に、彼と共に隠棲することを告げるものとなっている。

楊播も李白と同じ頃天子に任用されたが、早くに去つたらしい。

この詩が、まだ朝廷内にいる楊播に向けたものか、既に退隱している楊播へ向けたものかは不明。前者であれば、忙しげに貴顕と交わる姿を見せつつ、「宮仕えは辛いよな」と楊播へこつそりと目配せをし、知己を確認しているものとなる。後者であれば、その場にはいない楊播に対し、「やがて退隱するが、もう少し待っていてくれ」と呼びかけるものとなる。

「参考2」送楊山人歸嵩山

楊山人の嵩山に歸るを送る

前集等収録せず

文苑英華（以下「文苑」）卷三三一、全唐詩卷一七六、宋本卷一五、

王注本卷一七

李白

かりの蒲は紫の花を開く」とある。白龍…後漢の瞿武という人が仙草を服用し、ついには白龍にのって去ったという話が伝わる（「廣博物志」）。

口語訳

私には永久の住処とすべき場所がある

それは嵩山南麓の玉女峯だ

そこでは一片の月を長く引き留め

東の溪谷の松に掛けている

あなたはその嵩山に去り、仙草を摘まれるだろうが

そこには菖蒲の花が紫に咲き誇っているだろう

それゆえ年も暮れて私があなたを訪問しても

あなたは既に白龍に乗って、蒼空へ昇ってしまっただろう

解説

韻字は、「峯・松・茸・龍」で、上平二冬の韻。五言律詩。

大野は天宝四年（七四五）の作といい、安注は同三年（七四四）の作とする。いずれにせよ、李白が長安の朝廷を追われてすぐ後のものとなる。高適にも「送楊山人歸嵩陽」がある（「全唐詩」卷二一六）。同じ折のものだとすれば、送別の宴を共にしたものか。前半は高山を描き、後半で楊山人がそこへ帰ることを述べる。

【40】送友人尋越中山水 友人の越中の山水を尋ぬるを送る

李白

前集巻上

本文と訓訳

我有萬古宅 我に萬古の宅有り

嵩陽玉女峯 嵩陽の玉女峯

長留一片月 長く一片の月を留め

挂在東溪松 掛けて東溪の松に在り

爾去掇仙草 爾去りて仙草を掇れば

菖蒲花紫茸 菖蒲あり花紫茸たり

歲晚或相訪 歲晚に或いは相ひ訪はば

青天騎白龍 青天に白龍に騎らん

文字の異同と校勘

宋本を底本とする。「三・四句」宋本・王注本・全唐詩一作君行到此峯、餐霞駐衰容。

語注

嵩山…河南省登封県の中岳。太室山系と少室山系からなる。玉女峯…

大室二十四峯のひとつ。菖蒲…「神仙伝」「抱朴之」などで仙草とされる。

李白に「嵩山採菖蒲者」（宋本卷二二）があり「我來採菖蒲、服食可延年」

の句がある。紫茸…茸は草の芽吹き、あるいは花が開くこと。謝靈運「於

南山往北山、經湖中瞻眺」（「文選」卷二二）に「新蒲含紫茸（芽吹いたば

本文と訓詁

聞道稽山去 聞くならく稽山に去ると
 偏宜謝客才 偏へに謝客の才に宜し
 千巖泉灑落 千巖泉灑落し
 萬壑樹縈迴 萬壑樹縈迴す
 東海橫秦望 東海は秦望に横たはり
 西陵遠越臺 西陵は越臺を遠る
 湖清霜鏡曉 湖は清し霜鏡の曉
 濤白雪山來 濤は白くして雪山より來たる
 八月枚乘筆 八月枚乘の筆
 三吳張翰杯 三吳張翰の杯
 此中多逸興 此の中逸興多けれども
 早晚向天台 早晚天台に向かはん

文字の異同と校勘

なし

語注

八月枚乘筆…秋は錢塘江の大溯流がよく起こる。枚乘「七發」(「文選」
 卷三四)に「觀濤乎廣陵之曲江」とあり、大溯流を描写する。張翰…魏
 末から東晋のはじめの人。文をよくしたという。「晋書」卷九二本伝。そこ
 には「後世に名が残るよりは、今の一杯の酒の方がいい」と述べたという
 話を載せる。

口語訳

聞くところによれば、君は会稽山に行かれるとか
 そこは謝靈運が詩才を發揮したところ、君にもぴったりだろう
 千もの巖が重なって滝の水が注ぎ
 万もの谷に樹木が廻るよう生えている
 東には秦望山を隔てて大海が横たわり
 西には越台を廻るようにして丘陵が広がる
 湖は澄み切っていて、霜が降りた明け方の鏡のようだし
 白い波しぶきは、雪山から下りてきたかのようにだ
 八月に觀濤した枚乘の筆致にあやかり
 三吳の地で、張翰と心を同じくして酒を楽しむがいい
 この地は誠に興趣に尽きないが
 更にいつかは天台山へも向かわれることだろう

解説

韻字は「才・迴・臺・來・杯・台」で、上平一 灰の韻。五言
 排律。

大野・安注とも年代不詳とする。

会稽山へ向かう友人を見送り、その山水のすばらしさを歌う。
 そして最後に会稽山もいよいよけれど、天台山こそが最高であり、是
 非そこへ行くよう薦めている。直接天台山のすばらしさを描写す
 るのではなく、会稽山のすばらしさを描いた上で、天台山をそれ
 より上に位置づける。またこうした美しい山水は、謝靈運・枚乘
 ・張翰といった優れた文人に、その詩才を發揮させるところであ

るといふ。山岳の持つ魅力や価値のひとつとして、この点を直截に述べた詩となっている。

【41】金陵送張十一再遊東吳

金陵にて張十一の再び東吳に遊ぶを送る

李白

前集別集

文苑卷二六九、全唐詩卷一七六、宋本卷一五、王注本卷一七

本文と訓訳

張翰 黃花句

張翰 黃花の句

風流 五百年

風流 五百年

誰人 今繼作

誰人か今繼ぎ作る

夫子 世稱賢

夫子世に賢と稱す

再動 游吳權

再び吳に遊ぶの權を動かし

還浮 入海船

還た浮かぶ海に入るの船

春光 白門柳

春光 白門の柳

霞色 赤城天

霞色 赤城の天

去國 難爲別

國を去り 別れを爲し難く

思歸 各未旋

歸を思ひて 各おの未だ旋かへらず

空餘 賈生淚

空しく餘す 賈生の淚

相顧 共悽然

相ひ顧みて 共に悽然たり

文字の異同と校勘

「權」宋本・全唐詩・王注本作棹。

語注

金陵…建康。今の南京あたりのまち。張十一…不詳。張翰黃花句…

張翰は【40】。彼の「雜詩」(「文選」卷二九)に、「青條若總翠、黃華如散金」

とある。白門…建康城の西門。賈生淚…「史記」屈原賈生列伝に、賈

誼が中央政府から放逐され、梁王の太傅となったが、王が落馬して命を失

うと、傳としての役割を果たせなかったことを悔やみ、一年以上泣きとお

して死んだという話がある。時局を悲憤慷慨しての涙と見る注もあるが、「史

記」に基づく限り、中央から放逐されて辺境の地に追いやられ、更にそこ

でも何事もなしえなかったことを悔やみ、歎いての涙である。

口語訳

張翰は、「黃華は金を散ずるが如し」の名句を作ったが

その遺風は五百年後の今に伝わる

今では誰がそれを継いでいるかといえば

まさに君がそれで、世間では賢者と称されている

その君は、再び吳の地に遊ぶための舵をあやつり

海に入る船に乗って水に浮かんでいる

おりしもここ金陵では、春の光が西門の柳を輝かせているが

あの赤城山あたりでは、天空を赤い霞が包んでいることだろう

私たちは今でも故郷を離れている身だから、ここでお別れするの

は更に苦しいものがある

帰りたい気持ちはあるが、君も私も果たせないでいる

異境の地で果てた賈誼のような涙を、私たちも空しくも流し

顧みては、共に傷ましい思いを抱くのである

解説

韻字は、「年・賢・船・天・旋・然」で、下平一先の韻。五言排律。

大野・安注ともに、天寶八年（七四九）の作とする。

別れの悲傷を歌うものだが、そこに「功成り名遂げ」ることなく、異境で無駄に時を過ごしてしまっている自分（達）の悲哀を重ねている。

金陵城の西門で見送っているのだが、張某の旅先が、題では「東吳」とあり、方角が逆である。あるいは西門から出るが、ぐるつと回って東へ向かうのか。詩の本文では霞のかかった赤城山が登場するが、これは呉ではなく越。あるいは張某は、東呉の後に天台山へ行こうとしているのか。

あるいはそうした地理的な関係は重要な問題ではなく、張某の訪問先として天台山が設定されているのは、対句作りを考慮してのものか。「春光白門柳」と「霞色赤城天」とで、「ここ」での明るい光と「むこう」でのぼんやりとした霞との対比や、「白」と「赤」の色彩語の対比などがある。表現の点で、後掲の絵画を見ての作と通ずるところがある。対句としてはよくできていると言えるが、言い方を換えれば、対句のために赤城山を選んだだけであるのかもしれない。そうであれば、天台山（赤城山）という山岳そのものに対する李白の視線は冷めたものであるといえよう。

【42】送紀秀才游越

紀秀才の越に遊ぶを送る

李白

前集など収録せず

文苑卷二六九、全唐詩卷一七六、宋本卷一五、王注本卷一七

本文と訓訳

海水不滿眼	海水も眼に満たず
觀濤難稱心	濤を観るも心に稱ひ難し
即知蓬萊石	即ち知る蓬萊の石
却是巨鼇簪	却つて是れ巨鼇の簪なるを
送爾遊華頂	爾の華頂に遊ぶを送れば
令余發鳥吟	余をして鳥の吟を發せしむ
仙人居射的	仙人射的に居り
道士住山陰	道士山陰に住む
禹穴尋溪入	禹穴は溪を尋ねて入り
雲門隔嶺深	雲門は嶺を隔てて深し
綠蘿秋月夜	綠蘿秋月の夜
相憶在鳴琴	相ひ憶ふこと鳴琴に在り

文字の異同と校勘

宋本を底本とする。「令」詹注作令。

語注

紀秀才…不詳。觀濤…錢塘江の逆流を眺めることをいうが、ここでは海の波を見ると取った。巨鼇…巨鼇が神山を支えている話は「列子」湯問。【35】に見える。發鳥吟…王粲「登樓賦」(「文選」卷一一)に「壯鳥顯而越吟」とある。越人の莊鳥が、異国の楚で貴頭となったが、故郷を思

つて越の歌を歌った。李白「贈崔侍御」(宋本卷八)に「笑吐張儀舌、愁爲
莊鳥吟」とある。射的：射的山。会稽の東南にあり、羽客が住んだとい
う。道士住山陰：「法書要録」卷二には、王羲之が山陰に住む道士が飼
っている鶯鳥を欲し、河上公注「老子」を書写して交換したという話があ
る。禹穴：禹に関わる洞窟で、司馬遷も探訪したという(「史記」太史公
自序)。会稽あたりにあったという。雲門：会稽の南にある山。あるいは
そこにあった雲門寺。緑羅秋月夜：【38】に「天台緑羅月」の句がある。

口語訳

大海原の水も目を満たすものではなく

銭塘江の逆流の大波も心を満足させるものではない

そこで理解できる、蓬萊山の巨岩も

それを支える巨大な龍から見れば、簪程度のものに過ぎないと

あなたが華頂峯に遊ぶのを見送っている

故郷の越の歌を歌った莊鳥と同じく、私も越を詩に詠みたくなっ

た

越には羽客の住む射的山があり

山陰には王羲之に鶯鳥を与えた道士が住んでいるという

禹穴は溪流を溯ったところにある

雲門山も嶺を隔てた奥深いところにある

(その越の地で) 緑の鶯が秋の月に照らされている頃には

琴を鳴らして共に楽しんだ私のことを思い起こしてほしい

解説

韻字は「心・簪・吟・陰・深・琴」で、下平一二侵の韻。五言

排律。

大野は【41】と同じ頃、天寶八年(七四九)の作とし、中国の
諸注もだいたい同意見。但し安注は作年不詳とする。

詩全体の流れはいまひとつ得心がいかないが、一応右記のよう
に訳してみた。友人の紀秀才が越の方へ旅するのを見送り、自分
の彼の地への憧れを詠う。紀秀才の訪問先である越の代表として、
華頂峯があげられている。しかし、具体的な描写や豊かなイメー
ジの展開は見られない。

【43】贈僧崖公 僧崖公に贈る

李白

前集別編

全唐詩卷一六九、宋本卷九、王注本卷一

本文と訓訳

昔在朗陵東 昔朗陵の東に在りしとき

學禪白眉空 禪を白眉空に學びたり

大地了鏡徹 大地は了として鏡の徹するごとく

迴旋寄輪風 迴旋して輪風に寄す

攬彼造化力 彼の造化の力を攬り

持爲我神通 持して我が神通と爲す

晚謁太山君

親見日没雲

中夜臥山月

中夜臥山月

晩に太山君に謁し

親しく日の雲に没するを見る

中夜山月に臥し

拂衣逃人群
授余金仙道
曠劫未始聞
冥機發天光
獨朗謝垢氛
虛舟不繫物
觀化遊江濱

衣を拂ひて人群より逃る
余に金仙の道を授く
曠劫未だ始めより聞かざるなり
冥機 天光を發ひらき
獨り朗として垢氛を謝す
虚舟 物に繋がれず
化を觀て江の濱みぎはに遊ぶ

江濱遇同聲
道崖乃僧英
說法動海嶽
遊方化公卿
手秉玉塵尾
如登白樓亭
微言注百川
臺臺信可聽
一風鼓群有
萬籟各自鳴
啓閉八牕牖
託宿掣電霆
自言歷天台
搏壁躡翠屏
凌兢石橋去
恍惚入青冥
昔往今來歸

江の濱にて同聲に遇ふ
道崖 乃ち僧英なり
說法は海嶽を動かし
遊方しては公卿を化す
手に玉の塵尾をとり
白樓の亭に登るが如し
微言 百川に注ぎ
臺ひび臺として信に聽くべし
一風 群有を鼓し
萬籟 各おの 自おのづから鳴るがごとく
閉せる八牕牖を啓くがごとく
託宿に電霆を掣ひくがごとく
自みづから言ふ 天台を歴す
壁を搏ち 翠屏を躡み
凌兢として石橋を去り
恍惚として青冥に入らん、と
昔往き 今來歸す

絶景無不經 絶景經ざるは無し
何日更攜手 何れの日か更に手を攜へて
乘栢向蓬瀛 栢さかづきに乗じて蓬瀛に向かはん

文字の異同と校勘

「牕」全唐詩作窗。「言」底本作去。倣宋本・全唐詩・王注本改言。

語注

僧崖公…不詳。 朗陵…河南省の山名。 白眉空…不詳。 鏡徹…「楞嚴經」卷一に「觀諸世間大地河山、如鏡鑑明、來無所粘、過無踪跡」とある。 輪風…「法苑珠林」卷四に「智度論云、三千大千世界皆依風輪爲基」とある。 造化…「莊子」大宗師に「今一以天地爲大鑪、以造化爲大冶」とある。 金仙…仏。 曠劫…とても長い時間。 冥機…深い覚り。 天光…「莊子」庚桑楚に「宇泰定者、發乎天光」とある。 垢氛…謝靈運「述祖德詩」(「文選」卷一九)に「兼抱濟物性、而不纓垢氛」とある。 孤舟…「莊子」列禦寇に「泛若不繫之舟、虚而遊者也」とある。 觀化…「莊子」至樂に「吾與子、觀化而化及我、我又何惡焉」とある。 同聲…「易」乾・文言伝に「同聲相應、同氣相求」とある。 白樓亭…「世說新語」賞譽に、孫綽と許詢とが白樓亭で清談したという話がある。 臺臺…努めて倦まない様。「詩經」大雅・崧高に「臺臺申伯」とあり、「晋書」謝安伝に彼を「此客臺臺」と表したという話がある。 掣電霆…稲妻がきらめく、短い時間の形容。 崖公の教えを聞いた人々が、瞬時に悟りを得た様を形容しているのだろう。 王羲之「筆書論」に「擺撥似驚雷掣電」とある。 凌兢…恐れおののく様。

口語訳

私はかつて朗陵にいたとき

白眉空という高僧に禅を学んだ

それによれば、大地の間のすべての事物は鏡に映るようにはつき

りと分明で

吹く風によって廻るように常に変化・流転している

そこで彼^かの造物主の力を身に付け

己の神通力とするのである、と

その後、泰山の神に拝謁し

親しく太陽が雲間に没するのを見た

夜中に月の照らす山中に臥し

同宿のものたちから逃れ深山に入った

神は私に仏の道を授けたが

それはまだ誰も聞いたことのない未来永劫に続く真理であった

天の光がきらめいたように、一瞬にして深遠な悟りに至り

吾ひとり俗塵を払い落とすことができた

それ以後、繋がれない船の如く、何者にもとらわれることなく

自然の物化を觀しながら長江のほとりまで流れてきた

その長江の水際で、心を同じくする友と出逢った

道崖といい、傑出した僧侶である

その説法を聞けば、大海や大岳までもが心を揺るがし

四方に遊説しては、公卿たちですら教化され帰依する

崖公が玉の払子を手にして法を説くその様は

孫綽や許詢が白樓亭で清談しているかのように清らかだ

その精微な言葉は、百川の水の流れの如く流麗で

倦むことの無いその説法は、まことに傾聴するにたる

それは喩えれば、一陣の風が万物に吹き寄せると

それぞれにある穴が自ずから音を響かせるかのようだ

閉ざされていたすべての窓がからりと開いたよう

夜中に稲妻がピカリときらめくように、仏の教えを一瞬にして覺

るのである

その崖公が言うには、かつて天台山を遍歴した

絶壁をよじ登り、碧の屏風のような巖を踏んで

おののきながら石橋を渡り

恍惚として青空に入ってしまったのだと

先に出かけて今還ってきたばかりで

絶景はすべて経巡ってきたとのこと

(天台山は確かにすばらしいところであるが)いつになったら君

と手を携えて

盃に乗って蓬萊・瀛州といった本当の神山に行けるのでしょう

解説

韻字は、「東・空・風・通」で、上平一東の韻。「君・雲・群・

聞・氛・漬」で、上平一三文の韻。後半は通韻であろう。下平八

庚と下平九青とを通じると見た。「聲・英・卿」で下平八庚、「亭

・聽」で下平九青、「鳴」で下平八庚、「霆・屏・冥・經」で下平

九青、「瀛」で下平八庚の韻。五言古詩。

大野・安注とも天宝一三年(七五四)の作とする。

崖公という僧侶に贈った詩で、この僧侶を褒め称えたものである。まず白眉空という禅僧をあげ、次にそれを上回る存在として道教の泰山の神を示し、更にそれよりも優れた存在として崖公を位置づける。贈答の詩であれば仕方がないが、手放しの礼賛には節操が感じられない。

詩題にある僧崖公が、自らの天台山遍歴を述べるところで、「搏壁」「翠屏」「石橋」といった、孫綽の賦を踏まえた表現を使用し、また「入青冥」と述べさせている。ここでは山川訪問先としての天台山のすばらしさを、登場人物をそこに行かせることで表現しているといえる。ただしその表現は、孫綽の賦を踏まえるなど常套的な範囲を超えない。むしろ最後には「蓬萊・瀛州」への遊行をよりすばらしいものとしており、その点に注目するならば、崖公の天台山遊やあるいは天台山そのものは、真の仙界遊行の引き立て役としてここで登場させられている様にも見える。

C 神山としての天台山を詠うもの(一部)

【46】夢遊天姥吟留別 夢到天姥に遊ぶの吟、留別

前集巻上、許本巻六

河岳英靈集巻上、方外志巻三、全唐詩卷一七四、仏道詩歌

宋本巻一三、王注本巻一五

李白

「第一段」

海客談瀛洲
煙濤微茫信難求

海客瀛洲を談ずるも
煙濤微茫にして信まことに求め難し

越人道天姥

越人天姥を道いふに

雲霓明滅或可覩

雲霓明滅して或いは覩るべし

天姥連天向天橫

天姥天に連なり天に向かひて横た

はり

勢拔五嶽掩赤城

勢ひは五嶽を抜き赤城を掩ふ

台山一萬八千丈

台山一萬八千丈

對此欲倒東南傾

此に對し東南に倒れ傾かんと欲す

我欲因之夢吳越

我は之に因り吳越を夢みんと欲す

一夜飛度鏡湖月

一夜飛び度わたる鏡湖の月

「第二段の二」

湖月照我影

湖月我が影を照らし

送我至剡溪

我を送りて剡溪に至らしむ

謝公宿處今尚在

謝公の宿處今尚ほ在り

淥水蕩漾青猿啼

淥水蕩漾として青く猿啼く

脚著謝公屐

脚に謝公の屐を著け

身登青雲梯

身は青雲の梯を登る

半壁見海日

半壁に海日を見

空中聞天雞

空中に天雞を聞く

*長文なので、全体を三段に分ける。第二段はさらに二つに分けた。

本文と訓訳

千巖萬壑路不定 千巖萬壑路定まらず
迷花倚石忽已暝 花に迷ひ石に倚りて忽ち已に暝し

「第二段の二」

熊咆龍吟殷巖泉 熊は咆え龍は吟じて巖泉殷たり
慄深林兮驚層巔 深林を慄はせ層巔を驚かす
雲青青兮欲雨 雲は青青として雨ふらんと欲し
水澹澹兮生煙 水は澹澹として煙を生ず

列闕霹靂

列闕霹靂

邱巒崩摧

邱巒崩摧す

洞天石扉

洞天石扉

訇然中開

訇然として中に開く

青冥浩蕩不見底

青冥浩蕩として底を見ず

日月照耀金銀臺

日月照耀す金銀の臺

霓爲裳兮風爲馬

霓を裳となし風を馬となしたる

雲中君兮紛紛而來下 雲中の君は紛紛として來り下

る

虎鼓瑟兮鸞迴車

虎は瑟を鼓し鸞は車を迴らし

神僊之人兮列如麻

神僊の人列すること麻の如し

忽魂悸以魄奪

忽として魂悸き以て魄奪し

怳驚起而長嗟

怳として驚き起ちて長嗟す

惟覺時之枕席 惟だ覺むる時の枕席のみありて
失向來之煙霞 向來の煙霞を失へり

「第三段」

世間行樂亦如此 世間の行樂も亦た此くの如し
古來萬事東流水 古來萬事東流の水

別君去兮何時還 君に別れ去らば何れの時か還らん

且放白鹿青崖間 且く白鹿を放つ青崖の間

須行即騎 須らく行くべくんば即ち騎して

向名山 名山に向かはん

安能摧肩折腰事權貴 安くんぞ能く肩を摧き腰を折

りて權貴に事へ

使我不得開心顏 我をして心顔を開くを得ざらしめん

文字の異同と校勘

題を、河岳・方外志は「夢遊天姥吟留別東魯諸公」、全唐詩・王注本は「夢遊天姥吟留別（一作別東魯諸公）」。「道」宋本・方外志・全唐詩作語。「觀」全唐詩作睹。「台山一萬」宋本・方外志・全唐詩・王注本作天台四萬。「溪」宋本作谿。「潦」方外志作綠。「青」宋本・全唐詩・王注本作清。「壑」宋本・方外志・全唐詩・王注本作轉。「青青」方外志作冉冉。「缺」底本作闕。做宋本・全唐詩・王注本改缺。「邱」宋本・方外志・全唐詩・王注本作丘。「扉」宋本・方外志・全唐詩・王注本作扇。「裳」宋本・方外志・全唐詩・王注本作衣。「中」宋本・方外志・全唐詩・王注本作之。「來下」全唐詩作下來。「神僊」宋本・全唐詩・王注本作仙、方外志作僊。「奪」宋本・方外

志・全唐詩・王注本作動。「怳」方外志作恍。「兮」全唐詩作時。「向」宋本
・方外志・全唐詩・王注本作訪。「肩」宋本・方外志・全唐詩作肩。

語注

天姥：天台山の西北にある山。天台山系の一部をなす。越人：加藤は、
越人とは謝靈運を指すという竺岳兵の説を紹介する。謝靈運の「登臨海嶠、
初發疆中作。與從弟惠運、見羊何共和之」(「文選」卷二五、拙稿「其二」
)に「暝投剡中宿、明登天姥峯。高入雲霓、還期那可尋」とある。確
かに謝靈運の詩と類似する語が用いられているが、それにこだわらず、普
通に越の地方の人々と取っても通じるのではないか。鏡湖：浙江省会稽
山麓にあり、天姥山へ至る途中にあたる。剡溪：天台山を水源のひとつ
とする。淥：澄み切った様。青雲梯：謝靈運「登石門最高頂」(「文選」
卷二二)に「惜無同懷客、共登青雲梯」とある。列缺霹靂：楊雄「羽獵
賦」(「文選」卷八)に「列缺霹靂、吐火施鞭」とある。列缺は稲光、霹靂
は雷。金銀臺：郭璞「遊仙詩」(「文選」卷二二)に「神仙排雲出、但見
金銀臺」とある。霓爲裳：「楚辭」九歌・東君に「青雲衣兮白霓裳」と
ある。風爲馬：傅玄「吳楚歌」に「雲爲車兮風爲馬」とある。雲中君
兮紛紛而來下：加藤は李白詩「遊太山(其一)」の「玉女四五人、飄飄下九
垓」との類似性を指摘する。洞天石扉、訇然中開：ここも加藤は李白詩
「遊太山(其一)」の「洞門閉石扇、地底興雲雷」との類似性をいう。虎
鼓瑟：張衡「西京賦」(「文選」卷二)に「白虎鼓瑟、蒼龍吹笙」とある。
忽・怳：ぼんやり、茫然。あるいはそうした状態から一気に覚める。
白鹿：「楚辭」九章・哀時命に「浮雲霧而入冥兮、騎白鹿而容與」、
「古辭・王子喬」(「樂府詩集」卷二九)に「王子喬、參駕白鹿、雲中遨」とある。

口語訳

【第一段】

海辺に住む人々は瀛州のことを語るが
霧と波の彼方にぼんやりとして、尋ねるのは本当に難しい

越の人々は天姥山のことを言うが

雲や虹が明滅するわずかの間に、見えることもある

その天姥山は天に連なり、天に向かって横たわる

その勢いは五嶽を凌ぎ、赤城山を掩わんばかり

天台山は一万八千丈あるのだが

天姥山はそれに向かって東南に倒れかかるようにして

私はこの山について呉越の夢に見たいと思っていたが

それがあつた夜、月の照らす鏡湖の上を飛翔して渡っていた

【第二段の二】

月の光が私の影を湖面に照らしたし

私を剡溪まで連れて行ってくれた

そこには謝靈運殿が宿った住処が未だ残っており

澄み切った水がゆらめいて青々とし、猿の鳴き声が聞こえた

私は謝靈運殿の発明の登山靴を履き

青雲に架かる梯子を登っていった

絶壁の半ばでは海から昇る旭日を見

空中からは天界の鶏の時を告げる声を聞いた

岩山や谿谷が数知れず、道も定かなくなつて
花に目を奪われ、石に寄りかかつたりしている内に、忽ち夜にな
つてしまった

【第二段の二】

熊が咆え、龍がうなり、巖の滝の音と響きあい
深い林を震わせ、重なる峯々をもわななさせる
雲が青黒くわき上がり、今にも雨が迫り
谷川の水は揺れ動き、靄を発生させている

稲光がきらめき、雷が鳴り響き

丘や峯が崩落した

洞天に通じる石の扉が

轟然たる大音響と共に内側から開いた

(その中は別天地で) 青空が果てしなく広がり

太陽や月が神仙の棲む金銀の台を照らしていた

虹を裳裾にし、風を馬として

雲中に棲む仙人たちが、にぎやかに空から下りてきた

白虎が瑟を奏で、鸞鳳が車を牽引する

神仙たちが、麻糸をつむぐように次々と列をなしていた

と、突然、魂が発動し

驚き目覚めて起きあがり、やがて長く嘆息した

目覚めてみると枕と夜具とのみがあるばかり

先ほどまで見えていた仙界の霞もやは消え果てていた

【第三段】

思えば世間の楽しみなどこんなもの

古来万事は、河の水が常に東に流れ去るように一瞬で過ぎ去つて
しまうものだ

君たちに別れて去つてしまえば、還つてくるのは何時になるか
ひとまずは白鹿を青山に放とう

そしていざ出発という時にはそれにまたがり

名山へ向かうとしよう

肩を押さえつけ、腰を折つて、権貴の人々にへりくだり

心も顔も、鬱々とさせることなどできようか

解説

韻字は、第一段は、「州・求」で、下平一尤の韻。「姥・靚」
で、上声七麌の韻。「横・城・傾」で、下平八庚の韻。「越・月」
で、入声六月の韻。第二段は、「溪・啼・梯・雞」で、溪が去声
八霽の韻、啼・梯・雞が上平八齊の韻。「定・暝」で、去声二五
径の韻。「泉・巔・煙」で、下平一先の韻。「摧・開・臺」で上平
一灰の韻。「馬・下」で、上声二一馬の韻(8)。「車・麻・嗟・
霞」で、下平六麻の韻。第三段は、「此・水」で、上平四紙の韻。
「還・間・山・顔」で、上平一五刪の韻。長短句古詩。青木・武
部岩波・武部筑摩・松浦・宇野に訳注あり。

大野・安注とも天宝五年（七四六）の作とする。長安を追われ、失意の中でもがいていたときの作であろう。

天姥山への夢の遊行を歌う。加藤は、李白の「別儲巖、之剡中」（宋本卷一三）に「辭君向天姥、拂石臥秋霜」とあり、この詩を作った直後に朝廷に招聘されていると考え、彼は天姥山に行くつもりであったが、結局行かなかったとする。

第一段は導入部。かねがねあこがれていた天姥山を概説し、夢を見たこと。第二段が夢で訪れた天姥山の様。仙界として描かれる。第三段はまとめ。夢から覚め、仙界へのあこがれすらもはかないものだと悟る。そして名山への遊行の楽しみと価値を確認して、東魯に留まる人々に別れを告げる。

特に第二段は、李白の想像力のすばらしさが遺憾なく発揮されていると高く評価されてきた。加藤は、この詩は「夢で福地天姥山へ赴き、その神秘の境地と一体化することで、過去の抑圧された沈鬱な自分と決別し、新たな再生を遂げんとしたのだ」とし、さらにその夢から覚め、人生もそうした夢のようなものだとの大悟を示して、「この世を辞して神仙の「名山」へと向かう覚悟に至るといふ構成をとっている」とする。

天姥山は道教七十二福地の第十六に数えられる場所だが、語注で示したように、天台山系の一部をなしているといつてよい。唐の道士徐靈府の撰である「天台山記」には、天台山に隣接し、対峙している山として描かれる。天台山の石梁飛瀑と通じる石橋があるといい、劉晨と阮肇の二人が仙女に出逢ったのは天台山ではなく、この天姥山であったという。⁸⁾

この詩では、具体的な山岳の描写や、実体験に基づく記述は見

られず、天台山系への訪問経験が反映しているかどうかについては判断しがたい。天姥山は仙境、もしくは仙境への入り口であると捉えられている。そのことを描いたとして、「C 神山としての天台山を詠うもの」に分類した。遊仙詩として、また李白詩の思想的観点からは重要な詩であることは間違いないが、天台山（系）の詩群の中に置いてみた場合では、具体性に乏しいものであると言わざるを得ない。

注

（1）本稿は同趣旨の論文の六本目で、先立つものは次の通り。

「天台山の詩歌（其一）」 六朝以前（上）『埼玉大学紀要教育学部』第五八巻第一号 二 九年。「同（其二）」 六朝以前（中）『同』第五八巻第二号 二 九年。「同（其三）」 六朝以前（下）『同』第五九号第二号 二 一年。「同（其四）」 初唐『同』第六巻第一号 二 一年。「同（其五）」 盛唐（上）『同』第六一巻第一号 二 一一年。

（2）拙稿「其四」の【27】。

（3）熊飛校注『張九齡詩校注』中華書局 二 八年

（4）この詩が、大野の言う如く長安出仕中のものならば、詩の前半にみせた楊播への敬意は全く表面的なものとなろう。楊播は長安での役人生活を李白より一足先にやめ、天台山へ帰ろうとしている。いわば官途から脱落した身であり、李白はそうした楊播に儀礼的な敬意を示す。そして後半では、恩着せがましく、出世している身内を紹介しているのである。

（5）「侍從遊宿温泉宮作」は、温泉宮に行幸した天子一行の肅々たる莊嚴さを賛美したもの。「温泉侍從歸逢故人」は、天子から褒められたことに有頂天になり、出会った知人に、「君のことを天子に推薦してあげるからね」

と「上から目線」で見下したものとなっている。

(6) 【39】を本稿では開元年間の作とした。そうであれば、楊播は開元年間に天台山に帰り、その後天宝初めに長安へ出仕し、すぐに再び(天台山へ)隠棲したことになる。仮に大野の如く、【39】とこの詩を同じく天宝年間のものだとするならば、長安で一緒に出仕していた楊播が先に天台山に帰ることとなり、それを見送ったのが【39】で、それからほど遠くないころに楊播に送ったのがこの詩ということになる。

(7) 私見に過ぎないが、この詩と【39】とは、楊山人に対する李白のまなざしに大きな違いがあるように感じる。【39】では自分が皇帝に認められ、周囲からも評価されていることを信じており、己を高い位置に保っていた。その高みから楊山人を見ていた。それが、この詩では、楊山人の位置まで己を下げ、そこから隠棲する楊を見上げるものとなっている。自らも朝廷から放逐されることになり、先だって都を去っていた楊に寄り従う気持ちになっているものか。

(8) 下は上声ならば「した」の意味。「くだる」の意味の場合は去声二二禡で、韻が合わない。この句、全唐詩が「下來」とするのによるならば、韻字は「來」で、その前の「臺」などと同じく上平一灰の韻となる。いずれか決しがたい。

(9) 拙稿『天台山記の研究』(中国書店、二〇一一年)では、26で、四二六〜四三二頁、四五八〜四五九頁。

参考文献表

* 天台山の詩歌関係の資料書誌はこれまでと同じ。

* 李白関連テキスト及び注釈書等

宋刊本「李太白文集」(宋本)……平岡武夫『唐代研究のしおり 李白の作品』

京都大学人文科学研究所 一九五八年

王琦輯注「李太白全集」(王注本) 乾隆二四年(一七五九)跋:中華書局

版 一九七七年

瞿蜕園・朱金城校注『李白集校注』(瞿朱注) 上海古籍出版社 一九八

年…卷数は王注本に同じ

安旗主編『李白全集編年注釈』(安注) 巴蜀書社 一九九一年

詹鍇主編『李白全集校注彙集集評』(詹注) 百花文芸出版社 一九九六年

…卷数は宋本に同じ

久保天随『続国訳漢文大成 李太白詩集』 国民文庫刊行会 一九二八年

武部利男『李白』(武部若波) 岩波書店(中国詩人選集) 一九五八年

青木正児『李白』 集英社(漢詩大系) 一九六五年

武部利男『李白』(武部筑摩) 筑摩書房(世界古典文学全集) 一九七二

年

大野実之助『李太白詩全解』 早稲田大学出版部 一九八一年

笈久美子『李白』 角川書店(鑑賞中国の古典) 一九八八年

松浦友久『李白詩選』 岩波文庫 一九九七年

加藤国安「李白の天台山・天姥山の詩」『愛媛大学教育学部紀要 人文・社

会科学』第三十六号 第一号、第二号 二〇一三年〜二〇一四年

宇野直人『李白 巨大なる野放図』 平凡社 二〇〇九年

(二〇一一年九月三〇日提出)

(二〇一一年十月二二日受理)